

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22510253

研究課題名（和文）メディアとしての公共空間と国民化のプロセスに関する歴史人類学的研究

研究課題名（英文）A Study of Public Space as media and Nation-Building process

研究代表者

岡田 敦美 (OKADA ATSUMI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：40407630

研究成果の概要（和文）：

メキシコの公共空間の一つに、メキシコシティの地下鉄の駅構内がある。そのデザインは装飾的で、商業的広告のかわりに、メキシコの歴史に関連するテーマやモチーフが用いられたオブジェや壁画が多用され、メキシコの過去を再構成する場となっている。歴史は、祭典や記念碑、伝承その他の、様々な媒体によって記憶され、人々に伝達され、国民に共有されることにより、「国民化」に資するシンボルとなるが多かった。メキシコシティの地下鉄構内の一連の意匠もまた、そのような過去の歴史的な記憶を伝達する、広義の「メディア」としての役割を持っていると言える。先スペイン期の歴史などのメキシコの過去のできごとと同様に、メキシコ革命という歴史上のできごとは、国民国家の確立のためのアイコンとしての役割を与えられている点で、壁画運動と共通性が認められる。

研究成果の概要（英文）：

One of the public spaces in Mexico is an interior space of subway stations of Mexico City. A series of displays inside of the subway stations are highly decorative, and a lot of objet and mural paintings with theme and motives of national history and past of the country are used in many stations, instead of commercial relations.

We know history and the past are memorized, and transferred to the people, by way of rituals, monuments, and so on. Referred displays in subway stations have functions of “media”, in memorizing the history, as well as monuments and rituals. The Mexican Revolution was iconized and used in order to consolidate the State Nation as other historical issues like pre-Hispanic past.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：中・南アメリカ

1. 研究開始当初の背景

国民国家の確立に関する歴史的研究は数

多いが、歴史的できごとの記憶化や表象操作に関するメキシコの研究は、先スペイン期を象徴するモチーフの利用や、グアダルupesの聖母の役割、独立記念日に関する研究などが比較的豊富に蓄積されているが(David Brading, Enrique Florescanoなどがその代表である)、メキシコ革命に関する研究はほとんど無いといえる。

一方、メキシコ革命を国民国家の確立のプロセスであったとする見方の研究は、既に一つの潮流となっており(再考学派と呼ばれる潮流に含まれる)、更なる研究の深化が待たれるが、その際に、政策面においてだけでなく、文化的側面における実態の把握や分析が期待される場所である。例えば、メキシコ革命という歴史的できごとが、マスメディア以外のより広い意味での「メディア」を媒介として、アイコン化し、国民国家の確立や「国民化」に利用されるプロセスを明らかにする歴史研究などである。このことは、「メディア」の定義をどの範囲までと捉えることができるのかという理論的な課題とも結びつくだろう。

## 2. 研究の目的

本研究では、メキシコ革命という歴史的なできごとを、メキシコの「国民化」や国民国家の形成過程のなかで捉えようとするものである。そのうえで、公共空間のデザイン、ここではとりわけメキシコシティの地下鉄の駅構内の内部装飾を取り上げる——や、歌、工芸品さえ含む、広義の「メディア」とも言うべき媒介を通して、この歴史的できごとが、「メキシコ性」を表象したり、メキシコの国民国家の確立に利用されたりする諸相を、明らかにしようとするものである。

## 3. 研究の方法

(1)メキシコ革命を中心とする歴史的な出来事が、公共空間という広義の「メディア」を媒介としてどのように表象されてきたのか考える為に、まず、参照の対象として、それ他の「メディア」というべき領域—歌や映画、写真、工芸品など—におけるメキシコ革命の表象に関する先行研究を収集し、論点の整理を行う。

(2)公共空間の物理的な側面ではなく、社会的側面に関する理論的な展開を整理する。

(3)メキシコやラテンアメリカ以外の地域における国民国家の強化や、国民の表象をテーマとした先行研究を整理する。

(4)研究対象であるメキシコシティの市営地下鉄の駅構内という公共空間の、デザイン、試み、広報、プロジェクトなどを、広く現地で調査する。特にデザインのモチーフやテーマ、作者については、メキシコの過去(歴史)への言及、とりわけそこでのメキシコ革命の

取り扱い方に着目して検討する。

## 4. 研究成果

メキシコシティ地下鉄のほぼ全駅の構内において、現地調査を行った。構内のデザインは、駅の重要度、駅の作られた時代によって、とりわけ規模の面において、かなりのばらつきがある。①「タクバヤ駅」に代表される乗り換え駅(複数の線が通っている駅)、②「大学都市駅」に代表されるターミナル駅(ふつうそこから多くの郊外行きのバスが発着する)、③「ベジャス・アルテス駅」に代表される中心部の駅や観光資源のある駅、④「コピルコ駅」に代表される大きな公共施設のある駅、⑤「ピノ・スアレス駅」に代表される、駅の開設のための工事で地下から発掘されたものがある駅などに、壁画などの装飾が、手厚く配置されている。

これらの駅で用いられるモチーフの一つは、1920年代から30年代に隆盛を見た伝統的な壁画運動のモチーフと共通するものであり、テノチティランや鷹とサボテンといった、アステカ帝国を象徴するテーマ、マヤ文明の建造物や壁画、像のレプリカなど、先スペイン期の文明や、帝国の偉大さを想起させるものが多い(例えば「ベジャス・アルテス」駅、「タクバヤ」駅など)。



なお、先スペイン期、なかでもアステカ帝国のモチーフは、壁画運動でも好んで用いら

れたが、独立後の自由主義時代の19世紀を通して、あるいは植民地期末期(18世紀末)にさえも、スペインと異なるアメリカの独自性の根拠として、頻繁に使われるようになっていたものである。

「壁画運動」との継承性をうかがわせるそれ以外の特質としては、以下のことが挙げられる。①地下鉄の壁画の作家の系譜(師弟関係)に注目してみると、リベラやフリーダ、シケイロスらの「壁画運動」の偉人たちの継承者や、その周辺グループ(いわゆる「フリード」グループなどのほか、エスメラルダ美術校の卒業生など)の代表的な作家も何人かみられること、②巨匠たちの肖像を地下鉄の壁画に描くことにより、伝統的な「壁画運動」の巨匠たちへの献辞が表明されることが珍しくなく、その場合には、革命の時代と表裏一体だった壁画運動と、自らの連続性を、作家自らが明示的に表現していると考えるのが自然であること(「大学都市」駅、「コピル



コ」駅など)、  
が挙げられ  
る。

このよう  
に、「元祖」  
壁画運動自

体に、あるいはその巨匠たちに言及する（絵  
に書き込む）こと自体が、前衛的で文化的に  
活発だったメキシコ革命後の時代そのもの  
と、その時代の豊穡さを惹起、アピールする  
効果を持っていると考えられる。

一方、病院や国立大学などの公共施設が  
ある駅には、その施設の役割や性格に関連す  
る大型の壁画を配置されることが多い。「セ  
ントロ・メディコ（医療センター）」駅には、  
医療による進歩と、伝統医療—メキシコ独自  
の、古来からの伝統医療—を示す壁画が、「大  
学都市」駅には、歴代の知識人とともに新生  
国立大学の科学や学問の偉人達、そして中央  
に、メキシコ革命のアレゴリーが配置される。  
大学都市へのもう一つのアプローチ駅であ  
る「コピルコ」駅には圧倒的な規模の壁画が  
あるが、メキシコ各地の先スペイン期の遺跡  
のほか、リベラの肖像、ポサーダの著名な作  
品「アラメダ公園」の一部の「コピー」など  
が、征服の時代の歴史的モチーフなどと並ん  
で描かれる。

「国立ポリテクニコ大学」駅には、国立ポ  
リテクニコ大学の創立者であるカルデナス  
大統領を主たるモチーフにした壁画がある  
が、カルデナスがメキシコ革命最大の民衆的  
ヒーローであった政治指導者であったこと  
を勘案すれば、「あからさま」に政治的、と  
言うこともできるだろう。脇には、機械類や  
大学のロゴとともに、メキシコ原産で古くか  
らのメキシコの主食であるトウモロコシが、  
メキシコの国旗の色である赤、緑、白の三色  
に彩られて配置されており、メキシコ革命自  
体が、先スペイン期と並ぶ、メキシコ人に共  
有された歴史、として示される。このように、  
「学問と科学」、「メキシコ革命期（の壁画運  
動の巨匠たち）」、「先スペイン期の伝統」の  
三者が三位一体となって、地下鉄の壁画には  
描かれるのである。

革命期の有名な壁画のモチーフや、既にイ  
コンと化したヒーローの写真の一部がコピー  
され、援用される技法は、地下鉄の壁画に  
特徴的で、ウォホルの作品の中のモノロー  
の写真の思い出させるが、この技法はアメリ  
カのポップアートや、そこから多分に影響を  
受けた、メキシコ系アメリカ人がアメリカ各  
地で制作しているチカーノ・アートによく見  
られるものである。即ち、現代のメキシコ地  
下鉄の壁画は、チカーノ・アートやアメリカ  
のポップアートを参照してきた可能性が  
指摘できる。そしてこのアプロピエーション  
（援用）の手法こそが、現代と、既に過ぎ去っ

た革命期の壁画運動との結びつきを象徴し  
たり、印象付けたりするうえで、大きな役割  
を果たしていることが指摘できる。

スペイン人による軍事的征服のモチーフ  
は壁画運動の時代と同じように好んで用い  
られるものだが、動乱としての革命やその  
生々しさを示すモチーフは用いられず、寓意  
化された革命の兵士が用いられる。そして既  
に見たように、革命後の政権確立後に制度化  
されたもの（近代的大学や医療など）や、壁  
画運動自体とその時代といった、革命の文化  
遺産が描かれる。

とはいえ、⑤に代表されるように、メキシ  
コシティ旧市街を地下鉄工事の過程で地中  
を掘り下げるなかで、小ピラミッドをも含む  
多くの出土品（植民地期のもや先スペイン  
期のもの）に直面したため、場のもつ歴史性  
へ目を向けることが必然であったと考える  
こともできる。

このようにオブジェを構内に陳列したり、  
壁画を設置するだけではなく、展示会やコン  
サートなどのイベントが定期的にあちこち  
の駅構内で開催されており、展示やイベント  
に参加する機会は市民の誰にでも開かれて  
いる。市民が直接情報発信をする場が地下鉄  
によって提供されているとも言うことができ  
るので、地下鉄構内が、もっぱら政府が一  
方的に情報発信をして、国民を教化したり、  
取り込んだりする場になっているとは言え  
ないだろう。

地下鉄公団サイドに主導される企画のな  
かには、明示的に市民への「啓蒙」を目指  
した取り組みも数多くある。科学に関する一  
連の展示や、プラネタリウム化した地下鉄  
通路、読書推進の取り組みとしての駅構内  
における本の貸し出しブースの設置（” Para Leer  
de Boletó” と呼ばれるプログラム）などが  
それにあたる。

このうち、読書推進プログラムは、UNAM  
などの大学や、メキシコ連邦区教育省と連  
携して開始されたものだが、最近では、駅  
構内に携帯電話に読み物をダウンロードす  
るためQRコード（二次元バーコード）の掲  
示板を設け、無料でデジタル化された書籍  
を提供することにより、市民の読書を奨励  
するプログラムを開始した。この” Libropuerto  
Digital”（デジタル版・本の港／港の本）と  
呼ばれる取組みは、メキシコ連邦区教育  
省とメキシコ出版業界の連携のもと、ス  
페인語圏の古典的文学（マリオ・ベネ  
デッティやバルガス・リョサ、カルロス  
・フエンテスなど）、歴史関係の本、著  
名知識人の論評などの一章分を、まるごと  
無料で提供するものであるが、「読む」とい  
う行為が世界的に紙媒体から離れ、デジ  
タル化が進みつつある現状に即したサー  
ビスとなっている。

こういった試みは、地下鉄が、公的機関から市民へのアプローチを試みる場となり、手段となっていることを示すとともに、政府から市民へのアプローチのしかたは、政治的な取り込みや、自国の歴史の公定版を浸透させる目的に限定される訳ではないことを示しているだろう。

2000年に、半世紀以上政権の座にあったPRIが一旦下野する政権交代があったが、その際に駅名が変更された駅が二つある。「エチオピア」から「エチオピア／透明性の広場」へ、「ビベロス」から「ビベロス／人権」へ、の二つである。新たに駅名に登場した政治理念は社会改革というより政治改革志向を持っており、メキシコ革命と無縁のものであるが、かといってメキシコ革命にちなんだ駅名（「サパータ」や「北部師団」「アキレス・セルダン」「護憲派」などがある）が、新しい駅名に取って代わられたり、排除されたりすることはなかった。

メキシコ革命やそのヒーローは、アステカ帝国の最後の皇帝であったクアウテモック、自由主義者フアレス、イダルゴ、モレーロス、アジェンデらの独立運動の指導者たちと同じように、メキシコシティの駅名に残されている。ディアス独裁体制と革命体制に明確な断絶があったか疑わしいのと同様に、PRIが野党になっても、歴史のできごととしてのメキシコ革命やその表象は、排除されたり否認されたりするのではなく、メキシコ人が生きなければならなかった現実の歴史的な記憶として残されるのだと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

Atsumi Okada, “Las estaciones de metro como medios de comunicación: la representación de la revolución mexicana para la formación del Estado”, en International Conference “100 Years of Mexican Revolution: Versions and Visions in Literature, Film, Art and Popular Culture”, 2-3 September, 2010, Cardiff University, Great Britain.

〔図書〕(計 1件)

岡田敦美、岩澤康裕、『アラメダー丸ごとスペイン語』、朝日出版社、2013年1月、1-113ページ。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

岡田 敦美 (OKADA, ATSUMI)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
研究者番号：40407630

##### (2) 研究分担者

無し ( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

無し ( )

研究者番号：